



喜多埜

～百年前の御影みづかる～

この度、神奈川県にお住まいの古書収集家の方の自宅から、明治三十五年の菅公御神忌一千年大祭を記念し、当神社で奉製された菅公の御影が一百四年ぶりに発見されました。

この御神忌とは何かというと、菅公こと菅原道真公が薨逝されてからの区切りの年という意味で、二十五年、五十年などの区切り区切りの年に神前に燈明を供え、神事を奉仕し、菅公の御魂をお慰め申し上げる萬燈祭（まんどうさい）という祭典が古来より行われ、そして、この明治三十五年が一千年目の大祭でした。

この折、当神社でも、御神宝である網敷天神根本御影を模して掛軸が奉製されましたが、先の大戦の羅災の為、既に灰燼と帰していたものと思われていました。しかし、百年を超え、また戦災から復興五十年目の今年、再び菅公の御影が発見されたことに何かしらの天神さまの御神威を感じながらも、これからの百年、千年と、菅公の至誠の精神を受け継ぎ伝える大切さを新たにする思いです。

発見された御影（印刷用に画像処理されていますので、実際のものとは少し違います）



菅原道真公御影

～花火とマナー～

今年は長梅雨でしたが、その分、この八月は良い天候に恵まれそうと、各地の行楽地では多くの人出で賑わいそうです。

ですが、この賑わいと同じくして毎年問題になっているのが、花火の後始末です。この問題は随分と前からあったものですが、年々その悪質さに目を覆うものがあります。

当神社でも先月末、御本社境内に、花火を投げ込む者があり、ボヤ騒ぎまでおこる始末でした。花火は夏の夜の楽しみではありますが、それを扱うものには大人としての行動と認識を持って欲しいものです。

～分祀について～

昨今、靖国神社のA級戦犯の分祀についてにわかに論議を呼んでいます。この分祀とは一体何なのかという事に関して正確なところをご存知の方は少ないように感じます。

そもそも分祀とは、本体の御神霊を口ウソクの灯火としますと、分祀とは口ウソクから口ウソクへと灯火を移すようなもので、火そのものを分けるのではなく、御神霊が増えるというのが神道の考え方です。これは二千年もの歴史の中で育まれた日本人の神観念ともいべきものです。ですので、靖国問題で取り沙汰される御霊を分けるという行為は故人の御霊を引き裂く行為になる訳です。

この長い歴史ある観念をねじ曲げるというのは、今は良くて後世に必ず禍根を残し、宗教戦争の火種ともなりかねません。靖国問題に携わる方々には冷静な対応を期待したいものです。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ポータフォン
e z web 対応



編著 網敷天神社 禰宜（神主）

白江 秀知

